

二〇二四年五月三一日

暦年の校歴を知る楠若葉
大岩に立ち夏空を仰ぎけり
大空に背を翻す鳶涼し
足湯へと茅花流しの径辿る
霧吹かれ玉の雫の吊忍

かえる
風民
むべ
よし女
澄子

二〇二四年五月三〇日

銃眼に新樹光洩る城址かな
手庇に目つぶしの日矢夏木立
無人店レシピ添へある夏野菜
闇雲に草引く夫を詮無しと
しざるごと背中丸めて草を引く
採りたての札に誘はれトマト買ふ
初生りの胡瓜一本仏前へ
電線の弧を映したる植田かな

なつき
風民
康子
みきえ
きよえ
千鶴
明日香
よし女

二〇二四年五月二九日

龍馬像見下ろす浜や青あらし
日の匂ひ土の匂ひの髪洗ふ
山風に寄せてやまざる麦の波
補陀落のお山に詣で余花に逢ふ

千鶴
なつき
愛正
もとこ

二〇二四年五月二八日

夏霧に浮かぶ四万十川沈下橋
金継ぎの夫婦湯呑みに新茶汲む
翠巒の雨烟りして走り梅雨

千鶴
かかし
董雨

二〇二四年五月二七日

久闊を叙す緑陰の一墓碑に
白垂なる洋館並ぶ薔薇の丘
水揚げを確かめ四葩仏壇へ
吾子と編む白詰草の花冠
鳥帰る白砂の浜に潮目跡
石庭の砂紋に沿ひて蟻の列
腕白の狼藉無残梅雨きのこ

よし女
山椒
明日香
むべ
よし女
康子
たか子

二〇二四年五月二六日

バードバス埋めて薔薇の花手水
宮涼し手水を習ふ異国人
杜涼し疏水辿れば朱の鳥居
食べなせとフルコースなる初鯉

康子
たか子
もとこ
千鶴

二〇二四年五月二五日

石庭に一筋しるき蜘蛛の糸
てらてらと撫牛光る夏の宮
大小の石仏並ぶ木下闇
山法師白際立ちて夕帷

康子
たか子
かえる
満天

毎日句会みのる選・二〇二四年六月二日